

## 行政のこども虐待支援体制と 保健師自身の認識 ーネグレクトを中心にー

長弘千恵1)、小笹美子2)、外間知香子3)、  
當山裕子3)、仲野宏子1)

- 1) 国際医療福祉大学福岡看護学部
- 2) 島根大学医学部看護学科
- 3) 琉球大学医学部保健学科

### 【背景】

- ・行政保健師の多くがこども虐待支援に関与
- ・保健師によるこども虐待支援の具体的関わり方の報告は少ない
- ・こども虐待の相談件数は年々増加している

### 【研究の目的】

こども虐待の発生予防、早期発見・早期対応を行うために保健師が行っているこども虐待事例に対する職場の支援体制と保健師の虐待に対する認識の現状を明らかにすることを目的とした。

### 【方法】

対象: 14都道府県の保健師2705名に配布し、800部を回収した

方法: 郵送による無記名自記式質問紙調査

機関代表者もしくは責任者に調査実施の承諾を得た後に対象者への配布を依頼した。調査対象者は、調査の説明等を理解した上で調査票を記入し、同封の返信封筒に入れ返送を依頼した。

内容: 属性、把握方法、連携の現状、虐待支援事例数、母子保健業務の状況、こども虐待の認識

倫理的配慮

倫理委員会の承認を得て、質問紙に調査目的と意義、自由意思による参加を記載し、同意する場合のみの提出をお願いした。

分析: 統計解析ソフトを用いて記述疫学分析を行い、有意水準は5%未満とした。

### 研究協力者の基本属性

N=800(%)

性別	女性	774(96.8)	勤務先	市町村	618(77.3)	
平均年齢	39.4±10.2歳			県保健所等	166(20.8)	
年齢	20代	168(21.0)	人口規模	10万未満	485(60.6)	
	30代	238(29.8)		10万以上	295(36.9)	
	40代	210(26.3)		こども虐待(含む疑い)事例経験数	未経験	79(9.9)
	50代	151(18.9)			10事例以下	374(46.8)
	60代	11(1.4)			11~29事例	183(22.9)
平均経験年数	14.8±10.4年		30事例以上	70(8.8)		
保健師経験年数	10年未満	290(36.3)	研修受講	受講あり	628(78.5)	
	10~20年未満	228(28.5)		受講なし	167(20.9)	
	20年以上	260(32.6)	母子保健業務の経験がある 87%			
保健師免許	1年課程	460(57.5)				
	大学	324(40.5)				

### 市町村の支援体制(n=634)

母子手帳交付時に保健師か助産師が面接	569(71%)
乳児家庭全戸訪問に保健師か助産師が担当	457(72%)
乳児健診未受診者の100%フォロー	385(61%)
1.5歳健診未受診者の100%フォロー	379(60%)
3歳健診未受診者の100%フォロー	359(57%)

### こども虐待事例の把握方法(n=764)

他機関・他部署からの情報・依頼	医療施設	444	58.1%
	関係機関・他部署	572	74.9%
	福祉事務所	207	27.1%
	住民	372	48.7%
乳幼児健診での把握	乳児健診	355	46.5%
	1歳半健診	375	49.1%
	3歳児健診	374	50.0%
家庭訪問による把握	新生児訪問	316	41.4%
	乳児家庭全戸訪問	317	41.5%
妊娠届・母子健康手帳交付時の把握		348	45.5%

### 子ども虐待に対する保健師の認識 1

保健師の認識	特に問題なし (%)	不適切だが虐待でない (%)	頻繁であれば虐待 (%)	時々でも虐待である (%)	1回でも虐待である (%)
泣き声に対応しない(n=784)	0 (0.0)	103 (13.1)	507 (64.7)	148 (18.9)	26 (3.3)
母親の注視が乳児に向けられていない(n=783)	5 (0.6)	152 (19.4)	383 (48.9)	203 (25.9)	40 (5.1)
母児の視線が一致しない(アイコンタクトがみられない)(n=770)	15 (2.0)	330 (42.9)	245 (31.8)	147 (19.0)	33 (4.3)
乳幼児の頭や身体をなでる行動がない(n=779)	29 (3.7)	354 (45.4)	232 (29.8)	138 (17.7)	26 (3.3)
乳幼児をあやしたり、抱いたりしない(n=780)	2 (0.3)	120 (15.4)	386 (49.5)	219 (28.0)	53 (6.8)

### 子ども虐待に対する保健師の認識 2

保健師の認識	特に問題なし (%)	不適切だが虐待でない (%)	頻繁であれば虐待 (%)	時々でも虐待である (%)	1回でも虐待である (%)
理由なく乳幼児健診等をうけない(n=778)	1 (0.1)	123 (15.8)	208 (26.7)	243 (31.3)	203 (26.1)
親に精神疾患があり、全く面倒をみない(n=778)	3 (0.4)	122 (15.7)	158 (20.3)	157 (20.1)	338 (43.4)
子どもを保護して欲しいと相談に来る(n=771)	93 (12.1)	222 (28.8)	78 (10.1)	139 (18.0)	239 (31.0)
子どもの表情が乏しく、体重増加が悪い(n=768)	1 (0.1)	77 (10.0)	201 (26.2)	259 (33.7)	230 (29.9)
理由なく子どもを通園させない(n=774)	20 (2.5)	123 (15.9)	241 (31.1)	255 (32.9)	135 (17.4)

### 子ども虐待に対する保健師の認識 3

保健師の認識	特に問題なし (%)	不適切だが虐待でない (%)	頻繁であれば虐待 (%)	時々でも虐待である (%)	1回でも虐待である (%)
子どもに不衛生な服を着せている(n=785)	1 (0.1)	23 (29.3)	277 (35.3)	307 (39.1)	177 (22.5)
極端に不潔な環境の中で生活させる(n=786)	0 (0.0)	24 (3.1)	157 (20.0)	211 (26.8)	394 (50.1)
適切な食事を与えない(n=787)	0 (0.0)	3 (0.4)	101 (12.8)	236 (30.0)	447 (56.8)
親が酒やギャンブルでお金を使い給食や保育費を払わない(n=784)	0 (0.0)	51 (6.5)	92 (11.7)	225 (28.7)	416 (53.1)
子どもが刃物で遊んでいるのに止めない(n=785)	0 (0.0)	113 (14.4)	60 (7.6)	132 (16.8)	480 (61.1)

### 保健師の支援によって子ども虐待を予防できたと思う事例の有無による認識の差 1

保健師の認識	不適切だが虐待でない (%)	頻繁であれば虐待 (%)	時々でも虐待である (%)	1回でもその行為は虐待である (%)	P値
泣き声に対応しない	有n=497 62(12.5)	25(14.4)	100(20.1)	22(4.4)	0.11
	無n=175 25(14.4)	123(70.7)	26(14.9)	1(0.6)	
理由なく健診等を受けない	有n=492 1(0.2)	80(16.3)	114(23.2)	152(30.9)	0.17
	無n=174 1(0.6)	27(15.6)	59(34.1)	55(31.8)	
適切な食事を与えない	有n=499 1(0.2)	51(10.2)	149(29.9)	298(59.7)	0.48
	無n=175 1(0.6)	31(17.7)	52(29.7)	91(52.0)	
生命の危機があるのに病院に連れて行かない	有n=501 1(0.2)	4(0.8)	34(6.8)	462(92.4)	0.00
	無n=175 1(0.6)	11(6.3)	13(7.4)	150(85.7)	
座薬等で高熱を下げ通園させる	有n=497 6(1.2)	113(22.7)	162(32.6)	103(20.7)	0.01
	無n=176 2(1.1)	45(25.6)	61(34.7)	47(26.7)	

### 保健師の支援によって子ども虐待を予防できたと思う事例の有無による認識の差 2

保健師の認識	不適切だが虐待でない (%)	頻繁であれば虐待 (%)	時々でも虐待である (%)	1回でもその行為は虐待である (%)	P値
遊んで帰らず子どもの世話をしない	有n=498 1(0.2)	2(0.4)	102(20.5)	375(75.5)	0.00
	無n=177 1(0.6)	23(13.1)	38(21.6)	114(64.8)	
夜間、子どもを寝かして遊びに行く	有n=499 15(3.0)	50(10.0)	98(19.6)	336(67.3)	0.20
	無n=176 11(6.3)	28(15.9)	37(21.0)	100(56.8)	
世話をいやがり食事の回数が少ない	有n=499 -	13(2.6)	119(23.8)	367(73.5)	0.00
	無n=176 -	19(10.8)	58(33.0)	99(56.3)	
同居人等が虐待を行なっているのに放置する	有n=499 -	6(1.2)	29(5.8)	464(93.0)	0.27
	無n=176 -	8(4.5)	11(6.3)	157(89.2)	
お金を使い果たし保育・給食費が払えない	有n=497 28(5.6)	52(10.5)	133(26.8)	283(57.1)	0.01
	無n=176 12(6.9)	32(18.3)	57(32.6)	74(42.3)	

### 【結果】

- 子ども虐待事例の把握は、他機関・他部署の情報や依頼が多く、乳幼児健診や家庭訪問は半数に満たない
- 乳幼児健診未受診者の100%フォローを実施している市町村は60%である
- 保健師の認識では、生命に関わるような虐待は半数が1回の行為でも虐待と判断したが、乳幼児への「抱く、あやす、なでる」行為について虐待とする割合は少なかった
- 虐待を予防できたと思う事例がある保健師は、年齢が41歳で保健師の経験年数が16年であり、事例がない保健師より年齢、経験年数が高かった。また、虐待の認識では虐待と思う割合が高かった。

### 【考察】

1. 今回の調査では、乳幼児健診や家庭訪問等保健師が関わる業務によることも虐待の把握より、他機関からの情報や依頼が多かったことで、職種・関係機関との連携の重要性が深まっていると考えられた。
2. 虐待の認識では、直接生命に関わるような行為はほとんどの保健師が虐待と捉えていたが、虐待を予防できたと思う事例がある保健師ほど虐待と思う割合が高かった。虐待事例の支援が多い保健師は乳幼児期の親子の観察を重要と考えていることがしきされた